

「地域の持続性に向けた共創手法の深化」

杉山 祐子¹
日比野 愛子¹
曾我 亨¹
近藤 史¹
古村 健太郎¹
平井 太郎²
諏訪 淳一郎³

はじめに

本研究プロジェクトは、地域未来創生センターの総合的研究テーマである「持続可能で豊かな地域再創造」を背景として立案した。地域や社会との共創手法を、実践をとおして探索的に構築してきた昨年度の研究プロジェクトの成果とその検証をふまえて、アクション・リサーチの手法をさらに錬成し、共創手法の深化にむけて活動を継続している。

1. 背景と目的

「持続可能で豊かな地域再創造」を実現するには、地域の生活とその価値を共に創る社会科学的な実践を手法開発研究として進める必要がある。本プロジェクトメンバーは過去2カ年にわたり、地域の持続可能性にむけた地域との共創手法を探求し、地域との双方向的なやりとりを可能にするプラットフォームを構築してきた。この成果をふまえ、今年度プロジェクトでは、1) 地域における多様なアクターとのやりとりを通して、地域の可能性を展開するための実践手法を深化させること、2) 多様なアクターを組み込む組織形成の実態をより深く理解すること、3) 地域の潜在力を掘り起こす手法としての有効性を検討し、より汎用性をもつ手法への展開を期することを目的とする。

この過程に学生の主体的な参加を組み込むことによって、地域資源の発掘や共創手法の修得をめざす教育手法開発の機能も視野に含めた。

2. 実施体制と内容

今年度は対象地域を弘前市相馬地区にしほり、学生を巻き込んだ地域の活動への参与や実践により重点をおいた。また、昨年度まで2チーム体制で準備を進めてきた手法を統合し、実践にむけた検討をおこなうことをめざして、次のテーマに基づいた調査研究を相互浸透的に進めた。

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 弘前大学大学院地域社会研究科

³ 弘前大学国際連携本部

1) 地域の農家における生業の現場に密着し、その具体的な経営の工夫やライフコースとの関連を読み解く、2) 地域の伝統行事・イベントを支える組織形成の過程、運営および各アクターの相互関係や新たに生じた連携の実態について、学生と教員が積極的に参与しつつ実践的に調査検討する、3) 相馬地区のイベントの機会を利用して、ゲーミング・シミュレーションによって作成したゲームを試行し、参加者からもたらされる気づきを反映させる、さらに、このような協働による活動の成果や相互交流の促進にむけて、4) 相馬地区総合支所に設置した「弘大コーナー」およびワークショップを通して研究成果の還元をはかり、それらの場における各アクターからのフィードバックを次の実践に組み込む方途を探る。また、昨年度実現した「相馬 in 弘前大学祭」を継続し、相馬地区の産物販売とともに相馬地区の情報発信を研究発表とあわせて実施する。

3. 対象地域の特徴

弘前市相馬地区は、弘前市中心部から車で30分ほどの距離に位置する。12の集落から成るこの地区はもともと独立した自治体（相馬村）であったが、2006年の合併によって弘前市相馬地区となった。

リンゴ生産が盛んな相馬地区では、1970年代から地域をあげて農道の舗装や相馬産リンゴのブランド化、加工施設整備、農産物直売所の開設などの取り組みを活発に進めている。こうした「リンゴの村」としてのブランド効果もあいまって、地区内農家の収入は弘前市の平均よりも高く、弘前市と合併したあともJAが「JA相馬村」として独自の活動を続けている点にも特徴がある。また、近年注目されているグリーンツーリズムについても、「星と森のロマンピア」建設などで1990年代から先駆的に取り組んだ実績がある。

昨年度から本研究チームが注目してきたのは、人口減少のなかにあっても、新たな運営形態をとることによって集落の神社の宵宮をさかんにしたり、集落ごとにおこなわれていた岩木山お山参詣を村の有志団体が担ったり、ねぶたの合同運行に参加したりといった工夫がなされ、新たな伝統が生みだされていることである。

さらに、他地域出身者も含めさまざまな来歴の地域の若者が発足させた「相馬で夢おこし実行委員会」が中心となって「相馬でJAZZを聴かNIGHT」という新しいイベントを始めた点も興味深い。JA相馬村婦人部を母体とする「芽女倶楽部」や2017年度から弘前市の事業の一環として始まった女性グループ「ニケ」の活動も、地元農産物を使った加工食品の開発やネットワーク形成の点から注目したい活動である。

4. 調査と実践のアクション

1) 相馬地区の農家における生業に密着した調査は、3名のリンゴ農家にご協力いただき、5月から11月までの一連のリンゴ栽培作業の参与観察を軸とした。学生を中心にそれぞれの農家の園地での作業に複数回参与して、園地のようすや栽培の道具、その日の作業に従事する人数、作業のようすなどを詳細に観察し、休憩時間にはインタビューもおこなった。

その結果、次のことが具体的に明らかになった。①3件の農家が3件ともそれぞれに、独自の考え方にもとづいた特徴ある経営をおこなっている。労働力の確保や機械化についての経営方針はそれぞれ個性的であるが、リンゴの栽培・販売戦略をみると、この地域のリンゴ農家にみられるいくつかの類型の代表例となりうる、②ライフヒストリーでは全員が初職として相馬の外での就労経験があり、それぞれ20代、30代、40代と異なる年代で農業に本格的に関わるようになった経緯をもつ。農業に関わるようになった年代によって技術の修得方法や社会関係などの背景が異なる。③後継者についての課題はあるが、「師匠」とよべる農業者のもとで技能や考え方を磨くという、独特な伝達経路が技術の継承と錬成に重要な役割を



図1 「星まつり in そうま」



図2 「星まつり in そうま」 後片付け



図3 五所集落の宵宮風景



図4 紙漉沢集落の宵宮準備



図5 紙漉沢集落の宵宮出店



図6 相馬で JAZZ を聴か NIGHT

果たしている。

2) 地域の伝統行事やイベントへの参与を軸とした調査は、伝統的行事として五所集落と紙漉沢集落の宵宮、新しいイベントとして「星と森のロマンピア」における「星まつり in そうま」と「相馬で JAZZ を聴か NIGHT」を対象とした。それぞれの行事の準備に部分的に関わり、アクターどうしの連携や運営のようすを観察した。また、同時に、外部者から見たそれぞれの行事のアピールポイントを写真と短いキャプションであらわし、地域の方々との意見交換の素材とした。また、「星まつり in そうま」では駐車場状況調査や 157 名の来場者へのアンケートを実施、さらにゲーミング・シミュレーションの実践をおこない、結果を共有した。いずれの行事も住民によって主体的に運営され、子どもの参加が多く、宵宮にベトナム人研修生が招待されているなど、子どもから年配者まで幅広い世代の多様な人びとが集まり楽しむ場になっていることが確認された(図1～図6)。

3) 「星まつり in そうま」2019年7月14日(日)において実施したゲーミング・シミュレーションでは、2016年の社会調査実習の中で学生が作成した「疲 low 過 low ご苦労ゲーム」を試行し、地域住民と交流を通して参加者の反応や気づき、地域のイベントで実施する意義などを調査した。

「疲 low 過 low ご苦労ゲーム」は、地域の企業への参与観察をもとに、地域における働き方の課題を見つけだし、それをゲームにしたものである(図7)。このゲームでは、そのルールは、図8の通りである。今回の星まつりでは、家族連れの参加者が多かったため、小さな子どもでも遊べるようにルールを工夫した。家族連れの場合、親の職場の働き方におうじて子どもが答えるようにし、対戦相手となる学生は自分のアルバイト先での働き方から判断するようにした。そのほか、大勢の子どもがブースに訪れた場合は、課題カードの読み上げをせずに、課題カードの「色」のみで判断して、ジェンガの積み上げを行うなどの工夫も凝らした。

実施当日は、弘前大学ブースの中に設けたゲームのコーナーに、15組以上の多くの家族連れや子どもたちが訪れた。子どもたちにとっては、ジェンガのゲーム自体が面白く、また大学生と触れ合うことも楽しかったようだ。他方、保護者にとっては、ゲームが会話の契機になっていた。たとえば、2組程度の家族連れが同時にブースに訪れた場合、子供同士がジェンガで対戦している横で、保護者は会場で小休憩をとり、さらに課題カードと関連させながら職場での働き方の様子や、健康問題、また雑談などを進めていた。これに加えて、学生と保護者が、お互いの仕事(アルバイト)や生活の様子を紹介しあう場面も多くみられた。たとえば、訪れた保護者の一人は工場勤務の女性であり、課題カードの多くがあてはまらない



図7 フィールドワークからのゲーム作成 (2016年)

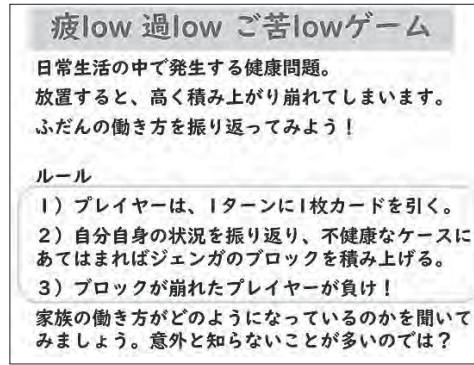


図8 疲low 過low ご苦lowゲームのルール

(不健康ではなく、職場の環境が整っている)と話していたことを学生たちは興味深く聞いていた。学生にとって、地域の働き方の実際を知る機会になっていたようだ。

「星まつり in そうま」では、これまでプロジェクトで開発してきたゲーミング・シミュレーションを実際に地域の現場で実施し、その効果を検証することができた。ゲームは、子どもから親世代まで、さまざまな人々を巻き込み、交流を深め、また、生活を共有し合うよい契機となる。とくに、学生自身がゲームを作成したことで、よりリアリティのある内容になったといえる。

4) 相馬地区総合支所に設置した「弘大コーナー」には、上記のアクションを通じて作成したポスターを掲示し、来場者に本プロジェクトの研究内容や成果の一部をわかりやすく伝えることをめざした。また、昨年度の弘前大学祭で実施した黒星病・台風被害のリンゴの価値向上をはかる試行的実践（大学総合文化祭）が好評だったため、黒星病の発生がなかった今年度も10月の弘前大学祭で相馬地区産のリンゴ製品販売をすることとした。当日は相馬地区のリンゴ農家、農家女性の加工団体「芽女倶楽部」の協力を得て、リンゴジュース、アップルパイ、タルトタタンなどの加工品やリンゴの販売をおこない、あわせて相馬地区の紹介、本プロジェクトの成果の紹介をおこなった。

おわりに

以上、今年度の本プロジェクトにおいて、これまでの活動から得られた知見の概要を記してきた。プロジェクトは現在も進行しており、1月30日に研究成果のフィードバックのためにワークショップと意見交換会を、2月4日に沢田集落でおこなわれる「ろうそくまつり」への参加・協力を予定している。本プロジェクトに協力していただいた相馬地区の方々のコメントや要望を、本プロジェクトにおけるこれまでの成果と相互にすりあわせ、地域との双方向的なやりとりから展開する地域デザインとその共創手法に関する知見を深めていくこととする。

なお、本研究プロジェクト実施にあたり、相馬地区の多くの皆様にご協力いただいた。記して心から感謝する。

<参考文献>

近藤史・杉山祐子・平井太郎・諏訪純一郎・弘前大学人文学部地域行動コース相馬班 2019『リンゴ農村の持続的展開—未来を見据えて現在を見る—弘前市相馬地区を事例に—』平成29年度弘前大学人文学部社会調査実習 弘前大学人文社会科学部。

日比野愛子 (2018). 「地域資源を興すローカル・イノベーション」, 『人間会議』冬号2017, pp. 136-141.

平井太郎 (編) 2019『ポスト地域創生—大学と地域が組んでどこまでできるか』弘前大学出版会。